

〈報告〉

長野県小谷村の伝統的カヤ場に自生するススキ属

小谷一央¹・尾関雅章²・井田秀行^{3*}

***Miscanthus* species in a traditional semi-natural grassland producing thatching material in northern Nagano Prefecture, central Honshu, Japan.** Kazuomi KOTANI¹, Masaaki OZEKI² and Hideyuki IDA³ (¹Course of Environmental Education, Faculty of Education, Shinshu University, ²Nagano Environmental Conservation Institute, ³Institute of Nature Education in Shiga Heights / Institute Mountain Science, Shinshu University, Yamanouchi 381-0401, Japan. *E-mail: pida@shinshu-u.ac.jp) *Bulletin of the Institute of Nature Education in Shiga Heights, Shinshu University* 51: 13-14 (2014).

二次草原（半自然草地）を代表する植生景観であるカヤ場は、主に屋根葺き用の草（ススキやカリヤスなどのイネ科草本）を採取するための場所である（池谷・井田 2008a）。本稿では、長野県北部に残る伝統的カヤ場において古くから茅葺屋根材として使用されているカヤ（イネ科ススキ属）に、少なくとも3種類あることが認められたので報告する。

長野県小谷村千国にある通称“牧の入カヤ場”（北緯36度45分52秒，東経137度51分44秒；標高約900～1200m；約31.4ha，写真1）は，北アルプス白馬乗鞍岳に発現する親沢左岸の斜面に広がる。かつて多くのカヤ場が分布していた小谷村では，カヤの需要減少に伴い大部分がスキー場に転用されたが，牧の入カヤ場のみは残された。当カヤ場は少なくとも江戸時代より管理されており，その維持に必要な野火つけ（火入れ）は毎年消雪後の4月ないし5月に行われ，刈り取り時期は10月下旬～11月上旬である。



写真1. 長野県小谷村千国に残る通称“牧の入カヤ場”

牧の入カヤ場では既に池谷・井田（2008b）がフロラ調査を行い，維管束植物70種を記載している。カヤ場を優占するのはオオヒゲナガカリヤスモドキ（*Miscanthus intermedius*）であり，小谷村では俗に“小ガヤ”と呼ばれ，屋根用の葺きガヤとして生産・維持されている。一方，一般的な葺きガヤであるススキ *M. sinensis*（小谷村では俗に“大ガヤ”と呼ばれる）も当カヤ場に広く自生する。ススキは近年になってオオヒゲナガカリヤスモドキの群落中に増殖しているが，その原因は分かっていない（池谷・井田 2008b）。小ガヤは大ガヤよりも良質な屋根材とされ，江戸時代には小谷村一帯のカヤ場で採れる同種が松本藩から重宝されていた（西山 2005）。

今回，2013年に採取した標本から同定されたのは，ススキ（*Miscanthus sinensis*），オオヒゲナガカリヤスモドキ（*M. intermedius*），カリヤス（*M. tinctorius*）である（写真2）。以下に，今回判明した3種類の特徴を記す。サイズは長田（1989）に拠る。

ススキ *Miscanthus sinensis*

3種のうちでもっとも大きくなり（高さ60～200cm），穂の数も多い（10～25本）。小穂（長さ5～7mm）は基毛（苞穎の基部に束状に生える長い白毛）が小花を大きく飛び出しており，芒も小花より長いことが特徴である。

オオヒゲナガカリヤスモドキ *M. intermedius*

高さは100～180cmで，穂の数は6～10本とススキより少ない。小穂（長さ7～8mm）は基毛が小花を少し飛び出す程度であり，芒の長さも小花より少し長い程度である。

¹ 信州大学教育学部環境教育分野

² 長野県環境保全研究所

³ 信州大学教育学部附属志賀自然教育研究施設／山岳科学総合研究所（*別刷請求先〒381-0401 長野県下高井郡山ノ内町志賀高原 E-mail: pida@shinshu-u.ac.jp）

カリヤス *M. tinctorius*

全体がオオヒゲナガカリヤスモドキと良く似るが、高さが60~100cmと小さい。カリヤスの方が穂の数も少なく(3~10本)、小穂(長さ5~6mm)にある基毛と芒も極端に短い点で、オオヒゲナガカリヤスモドキと区別できる。葉幅もカリヤスの方が細い。

なお、現地を踏査すると、2種の特徴が同じ桿や株の中で観察されることもあり、交雑種の存在も示唆された。例えば、ススキとオオヒゲナガカリヤスモドキの雑種(*M. sinensis* × *M. intermedius*: 長野県植物誌編纂委員会 1997)に類似した形態を持つものが認められている(池谷・井田 2008b)。今回は詳しい判定には至っておらず、交雑種の有無や分布状況の把握は今後の課題である。これまで当カヤ場では、オオヒゲナガカリヤスモドキとススキが主な優占種であるとされてきたが(池谷・井田 2008b)、以上から少なくとも3種類のススキ属が自生していることが明らかとなった。

当カヤ場は、良質な“小ガヤ”を優先的に残し、育てる目的で維持がなされてきた(西山 2005)。しかし近年は“大ガヤ”の繁茂などにより良質な“小

ガヤ”の分布域が縮小している。本稿で示したようにカヤの種類が具体的にになれば、それぞれの種の分布を示すことが可能となり、従来から重宝されてきた“小ガヤ”の生育状況を把握し維持・管理を効果的に行うことができるようになると考えられる。

本調査にあたっては、(株)小谷屋根の方々のご協力を頂きました。この場を借りて感謝申し上げます。本研究は、JSPS 科学研究費25340107の助成を受けたものです。

引用文献

- 池谷友希子・井田秀行(2008) 伝統的カヤ場はなぜ重要か? 採草地の景観生態学. 棟柱 **10**: 59-63.
- 池谷友希子・井田秀行(2008) 長野県小谷村に残る伝統的茅場の植物相. 信州大学教育学部附属志賀自然教育研究施設研究業績 **45**: 1-6.
- 長野県植物誌編纂委員会(1997) 長野県植物誌. 信濃毎日新聞社, 長野.
- 西脇亜也(2006) 農業の復興とともに草原を再生する. エコソフィア **18**: 34-39.
- 西山哲雄(2005) 茅場: 小茅をそだててきた人々. 棟柱 **8**: 79-88.
- 長田武正(1989) 日本イネ科植物図譜. 平凡社, 東京.

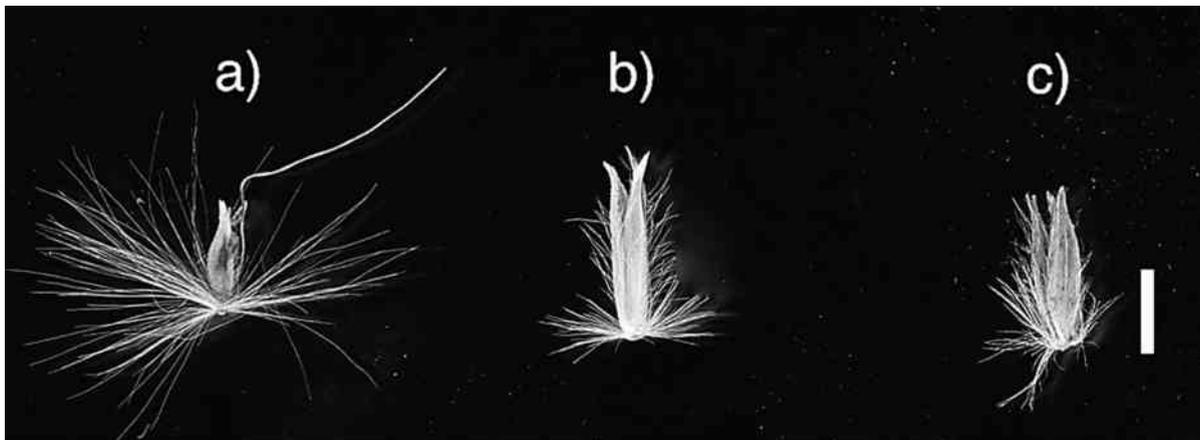


写真2. 長野県小谷村“牧の入カヤ場”に自生するイネ科3種の小穂

- a) ススキ *Miscanthus sinensis*, b) オオヒゲナガカリヤスモドキ *M. intermedius*,
c) カリヤス *M. tinctorius*. バーの長さは3mm